

歌集歌書を読む

鶴田伊津

□門脇篤史歌集「微風域」

原形をたもち続けて雑踏にマール
ブルチヨコのひとつぶはあり

日常の中で触れぬようにしてきた
ことが気づいたら何より自分と近
かった、そんな気分になる歌集だ。
日常の中ふと触れる「傷」や「悪
意」にも著者は「詩」を感受し、そ
れを読み手に突きつけるのではな
く、歌としてやわらかく立ち上げて
来る。「もの」をうたう時も、ただ
の「物質」として処理せず、「私」
と寄り添わせることで実感を増幅さ
せている。うたわれたものの質感が
そのまま感情の手触りを生んでい

る。比喩が上滑りしないのだ。そこ
に生まれる世界はくきやかで寂し
い。存在を言葉で実感し、共にあ
うとすることは孤独だが、著者の歌
の力となっている。二〇一八年現代
短歌社賞受賞の著者第一歌集。

折りたたみ傘か何かに潰されて
靴の底にチヨコラングドシヤ

(令和元年8月11日 現代短歌社 税別二五〇〇円)

□島本ちひろ歌集「あめつち分の二」

彗星のたてがみのなか真明マコに
燃やされるでしょう終わった恋
は

やわらかな言葉の中にもふとした翳
が射す「コスモス」所属の著者の第
一歌集。掲出歌は「彗星のたてがみ」
という鮮烈な比喩が一気に著者の世
界観に引き込む。「燃える」のではな
く「燃やされる」のは終わった恋。
かなしいはずなのに最後の姿は何よ
りも強い。「真明」が効果的だ。

蓋をしたかなしみのあり日に二
度の四時は途方に暮れやすくな
る

前半の瑞々しい青春歌から、後半
の母となつてからの歌も印象的だ。
夜明け前と黄昏時の「四時」のあて
どない感覚がシンプルにうたわれて
いる。著者の言葉は装飾が少ない
分、自分の魂の一部をそつと差し出
すように読み手に届けられる。その
さりげなさは短歌表現への信頼にも
似ている。

(令和元年9月20日 六花書林 税別二〇〇〇円)

□森尻理恵歌集「虹の表紙」

考えても詮無きことは考えない
時間がなければなおさらのこと
私たちは瞬間瞬間を生き、それを
記憶するがいずれその記憶も臚とな
ってゆく。だが、歌として残ったも
のは、その時の空気を纏って読み手
の前にその時間を立ちのぼらせる。

本集には著者の二〇〇八年から二〇一九年二月までの四四九首が収められている。日常詠、家族詠、職場詠、闘病詠……歌を名付けることはできるが、それ以上にどの歌も著者そのものように思える。上っ面ではない、懸命に生きている人間の存在感だ。描写の厚みが歌のリアリテイを支えて、著者の時間と並走したような読後感がある。「塔」所属。第三歌集。

三十年未だ忘れず食パンを積分
せよとう夢を見しこと

歌でしかものは言えない 誰も
彼も言葉の裏には生活がある

(令和元年8月23日 青磁社 税別二五〇〇円)

□渡辺茂子歌集「湖と青花」

ふるさとといつより呼びし季ご
とに愛かなしき彩見す琵琶のみづづ
み

言葉が一首の中でゆつたりと息づ

いている。結句の「琵琶のみづづみ」に至るまでの心の動きと琵琶湖の見せる季節ごとの表情を重ね、うねるような韻律でうたう。声に出して読みたくなる一首だ。言葉の分量と表現のバランスがいい。

道端にさみどりほつこり栗の毬い
拾ひて帰る今日のたまもの

人恋へばみづづみに付つ慣はし
もことばを持てるものさびし

さ

詠み込まれている「栗の毬」や「みづづみ」に著者の思いが宿っていて心地よい。言葉が歌の中で循環し、読み手に過不足なく伝わってくる。生活のよろこびもかなしみもめぐる季節の中で幾度も巡りゆくものなのだ。「霸王樹」同人である著者の第二歌集。

(令和元年9月14日 不織書院 税別三〇〇〇円)

□中沢玉恵歌集「ゆずり葉」

稜線のやさしくなりて裏うらハヶ岳
はふところに昼の雲を抱くなり
大柄でいながら濃やかな歌だ。視線の移り変わる様子から、ただ風景を眺めているのではなく、実感したものを言葉にしているのだとわかる。「みぎわ」所属の著者の第二歌集。

どんな幼虫だったの？おまえ朱
の紋をつけた黒蝶近よりてくる

ここにも著者の静かでやわらかい視線が生かされている。黒蝶の今の姿からその幼虫の時を思い、呼びかける。目の前にいる蝶だけでなく、その蝶という存在が経て来た時間を感じているのだ。それは一瞬の出来事かもしれない。しかしそれは生あるもの同士のかけがえのない今だけの時間なのである。

昭和・平成まるごと生きて春と
なるひとりの庭に鶉がきている

時代は移りゆく。しかし人の営みは続き、自然に、生活に心を動かし

ながら、生きていく、それを肯定してくるような一冊だ。

(令和元年9月7日 ながらみ書房 税別二五〇〇円)

□鈴木香代子歌集『6月のるん』

かたつむりが葉裏はうらにそだつてゆくようにこどもは眠りのちからで育つ

子の育つてゆく濃密で幸せな時間がやさしい言葉でうたわれている一冊だ。「かたつむり」の殻の渦模様もその時間の象徴のようで楽しい。

「眠りのちからで育つ」という認識も子を見つめるまなざしを感じさせていい。一心に子の成長を見つめている時間は愛すべきものだ。奇数ページに置かれたイラストも歌の童話のような雰囲気と合っていていい。

「いたかった」過去形かこけいおほえておさなこの時間はゆっくりふくらんでゆく

チベットのことはで「るん」は

風のこと梅うめの実ゆるする六月のるん

この一冊の描く世界はきつとこれから育つてゆく子供たちへの祝福なのだろう。

(令和元年8月26日 鶴書房 税別一〇〇〇円)

□川野里子著『葛原妙子』

葛原妙子は想像力を喚起する。その心地よさは作品の鑑賞を言語化する時は、逆に難しくなるように思っていた。著者の葛原妙子秀歌五十首鑑賞は言葉の切れがよく、何より歌の背景と共に読み解かれており過不足がない。特に「わがうたにわれの紋章いまだあらずたそがれのごとくかなしみきたる」の鑑賞は思わず線を引いたくらい示唆に富み、葛原の歌をもう一度この目線で読み返したくなった。「歌人」を読むことは自身を問うことなのだ。

(令和元年7月25日 笠間書院 税別二三〇〇円)

創生

篠井嘉一創刊

大上 正弘
岸 孝子
佐藤 則子
遠山 和子
丸山美寿子
小柳 毅

創生短歌会

発行所 〒252-0804 藤沢市湘南台6-1-5-701
小柳毅方

会誌創生進呈いたします。この広告をご覧になった誌名を添えてお申し込みください。

二〇一七・二月創刊 隔月刊

早わらび

綾塔 洋子
江寄多希子
小野茂登子
坂井 知栄
富田百合子
内藤百合子
森本トモエ
安福ちづ子

年会費 20首会員 1万円
10首会員 5千円
1回単位 10首会員 1.3千円

ワード歌稿 10%引

短歌会単位は1人1回 6首700円
旧号見本 84円切手2枚

編集・発行人 市原 敏司

〒501-3781 岐阜県美濃市片知588-1

早わらび短歌会(市原方)

TEL 0575-34-0643

FAX 0575-34-0526

Eメール sawarabit@ccn.aitai.ne.jp